

事前復興計画編

事前復興計画編 目 次

第1章	事前復興計画の概要-----	27
第1	事前復興計画とは-----	27
第2	事前復興計画の必要性-----	27
第3	復興の前提条件-----	27
第2章	事前復興計画のコンセプト-----	28
第3章	事前復興計画の目指すべき姿-----	29
第1	コンセプトその① 子ども-----	30
第2	コンセプトその② 高齢者・障がい者-----	31
第3	コンセプトその③ 働く世代-----	32
第4	コンセプトその④ 災害に強いまち-----	33
第5	コンセプトその⑤ コミュニティ-----	34

第1章 事前復興計画の概要

第1 事前復興計画とは

事前復興とは、災害後の甚大な被害を想定し、迅速かつ円滑な復興まちづくりの検討や対策を災害発生前に準備する取り組みです。

下知地区事前復興計画は、下知地区の住民が主体となって、災害後にスムーズに復興するため、地域の目指すべき将来像や復興の基本方針等を事前に検討したものです。

単に災害後のまちの姿を示すだけでなく、必ず来る災害に備えて将来のまちの姿を議論する方法や体制も含めて事前復興計画として位置づけ、とりまとめたものです。

第2 事前復興計画の必要性

下知地区では、近い将来に発生すると想定されている「南海トラフ地震」により、甚大な被害が想定されています。

これまで全国の大規模な災害では、復興計画は被災後に立案されてきました。しかし、避難生活を送り、将来の見通せない中で、住民に復興計画を十分に考える余裕はなく、短期間で作成された計画は必ずしも住民意見が反映されたものでありませんでした。

下知地区は、南海トラフ地震後に復興計画が必ず必要となります。しかし、低地であり、商工業施設も多いこの地区では、他地域への移転など人口流出も懸念されています。

災害に備えて命を守る防災対策ももちろん重要ですが、命を守ったあとの将来に希望が見えなければいけない、という思いより将来に魅力あるまちづくりを行うため、「事前復興計画」を立案したものです。

- 必ず来る津波、必ず来る復興
- 被災後に、まちづくりを考える余裕はない（合意形成に時間がかかる）
- 復興が遅れると、若い人がまちから出てゆき、地域が衰退
- あらかじめ被災後のまちづくりと手続きを考えておく、事前復興計画が必要
- 事前にできることは、どんどん進めて減災につなげよう

第3 復興の前提条件

下知地区では、「南海トラフ地震」による津波と地盤の沈降により、全域が長期浸水すると想定されています。しかし、被災後には生活や仕事の基盤があり、住み慣れた下知に戻りたいという住民の思いがあります。このため、高台等への集団移転ではなく、現在の下知地区の位置において「人の復興」（コミュニティ）と「まちの復興」（生活や仕事などの場）を行うものとします。

現状では、長期浸水域が完全にドライ化するまで（水が引くまで）に1カ月以上かかると想定されています。将来的には、堤防の耐震化、排水設備の向上という行政によるハード整備により、浸水期間が短縮されますが、すみやかに地域全体の復興・復旧を行うために下知地区防災計画（事前復興計画）を策定するものです。

第2章 事前復興計画のコンセプト

下知地区防災計画のコンセプトは、復興後に魅力あるまちとするため、「伸び伸び遊ぶ子どもたちを中心に、地域のつながりで、楽しく安心して暮らせる、災害に「も」強いまち下知」としました。

今までの復興は、「元に戻す」ことしか考えていませんでした。しかし、ここでは災害を乗り越えて「幸せになる物語」をつかっていきたいと考えました。

コンセプトを達成するための、たくさんの「幸せになる物語」を下知地区防災計画検討会において作成しました。

●幸せになる物語

中心に明るく開けた大きな公園があり、そこでは高齢者から赤ちゃんまで集える場所（はだして歩ける芝生、キャッチボールのできる広場）。その公園のそばには川が流れ、泳いだり、魚つりも出来、また、母親たちが買物に出かける店がある。そして何世代も集えるガラスばりのコミュニティーがあり、世代を越えた絆の深い安心・安全なまちに住んで「幸せになる物語」

地域の人みんな知っている！（皆が名前呼びあう）。

お話したことがある、遊んだことがある！地域が家族みたいで「幸せになる物語」

広い場所で制約なしに遊べる場所で「幸せになる物語」

水遊びと舟遊びができる水上公園で「幸せになる物語」

昭和村テーマパーク（運営企画：住民）。現在・過去・未来で「幸せになる物語」

学校、地域、商店、畑などで、ものづくりを体験して（畑仕事、おつかい、ロープの結び方、火を起こす、仕事体験、花づくりなど）「幸せになる物語」

運河と牧場が近辺に広がる「おいしんぼ」、都市。取れたての魚、新鮮なお肉いっぱい「幸せになる物語」

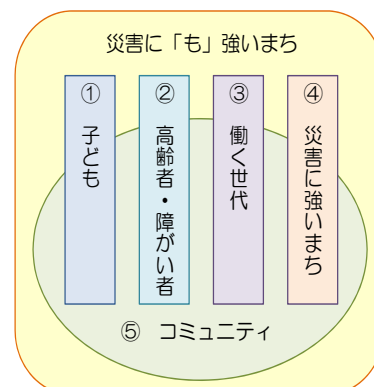
たくさんの「幸せになる物語」の真ん中にあるもの〈笑顔〉を、下知地区の住民みんなで見つめていきます。



第3章 事前復興計画の目指すべき姿

下知地区防災計画のコンセプトと「幸せになる物語」を実現するために、下知地区防災計画では、五つの分野（柱）を挙げました。

事前復興計画の目指すべき姿をこの五つの分野「子ども」、「高齢者・障がい者」、「働く世代」、「災害に強いまち」、「コミュニティ」ごとに挙げます。



■下知地区防災計画の五つの柱

第1 コンセプトその① 子ども

(1) 子どもについての復興の方針

- 大人たちは子どもの幸せを願っています
- 幸せは、良い人間関係で作られます
- 良い人間関係は、学習の場だけでなく遊びの場でも作られます

⇒子どもが伸び伸びと元気に遊べるまち



(2) 下知地区の目指す姿

子どもについて、下知地区では次のような姿を目指します。

子どもから高齢者まで集い、その中で子ども達が自分でルールや役割を学んでいける環境をつくります。

体力づくりをして、子どもが率先避難者となって高齢者を連れて避難できるようにします。

(3) 検討会にて出たアイデア

以下のアイデアも参考に、被災前後のまちづくりを行政と一緒に検討していきます。

◎みどりの公園

- 子どもから高齢者まで集うみどりの公園をつくる。
- 地域住民（子ども、大人、高齢者、障がい者）のコミュニケーションの輪をつなげ広げる。
- 大人や高齢者が知恵や話をしながら、子どもと防災教育、防災キャンプを行う。
- 高齢者が勉強や遊びを教える場とする。
- 総合型地域スポーツクラブを設置し、運動習慣を身につけて、子どもが率先避難者となる。

◎学校、保育園

- 盛土した安全な場所に学校を移転する。
- 防災教育を充実させる。
- 高齢者施設と保育園などの共有施設をつくる。

◎子どもの自主性

- 子ども自身でルールや役割分担を決めて、自主性を養い、可能性を広げる。

第2 コンセプトその② 高齢者・障がい者

(1) 高齢者・障がい者などについての復興の方針

- ・子どもは高齢者の幸せを願っています
- ・高齢者や障がい者などには、安心感と生きがいが特に大切です



⇒お年寄りや障がいがある人が安心と生きがいをもって暮らせるまち

(2) 下知地区の目指す姿

高齢者や障がい者などについて、下知地区では次のような姿を目指します。

高齢者、障がい者と子どもが、同じ施設で一緒に過ごせるようにします。

お互いが顔を知っていることで、生きやすくて強いまちにします。

(3) 検討会にて出たアイデア

以下のアイデアも参考に、被災前後のまちづくりを行政と一緒に検討していきます。

◎一緒に集える場所

- ・高齢者、障がい者、子どもなどが一緒に使う施設をつくる。
- ・高齢者と保育園との共有施設をつくる。
- ・特技クラブをつくり、野菜づくり、知恵、スポーツ、手工作、昔遊びなどを子どもと一緒にやる。
- ・スポーツクラブ、ゲーム、いきいき百歳体操を継続する。
- ・助け合い、話し合い、友達づくりを行う。

◎ユニバーサルな社会

- ・昔ながらの交流があるまちにする。
- ・高齢者の役割、仕事をつくる。
- ・障害者への理解を進める。
- ・道路の段差を解消したり、明るくする。

第3 コンセプトその③ 働く世代

(1) 働く世代についての復興の方針

- ・自らと家族の生活を支えるには、仕事で収入を得ることが大切です
- ・産業が早く復興し、働く場があれば、人もまちも元気になります



⇒産業が活発で働きやすいまち

(2) 下知地区の目指す姿

働く世代について、下知地区では次のような姿を目指します。

生活、事業、雇用などの相談窓口を、早期に立ち上げる準備を整えておきます。

中小企業 BCP を進め、仮設商店街をあらかじめ計画しておきます。

地元企業同士の交流・協力をしていき、いざというとき助け合います。

(3) 検討会にて出たアイデア

以下のアイデアも参考に、被災前後のまちづくりを行政と一緒に検討していきます。

◎生活の立ち上げ

- ・生活、事業、雇用などの相談窓口を早期に立ち上げる準備体制を整えておく。
- ・行政、保険会社、銀行、企業等の勉強会を実施する。

◎産業の復興

- ・BCP を推進する（行政、住民、企業が一体となって）。
- ・地元企業間の交流をし、いざというときは助け合う（普段は宣伝や地産地消）。
- ・株式会社下知を実現する。
- ・のれん33番地と連携をする。
- ・仮設商店街を実現させる（個人経営連合）。
- ・コンパクトタウンを建設する。

第4 コンセプトその④ 災害に強いまち

(1) 災害に強いまちについての復興の方針

- すべての世代が力を合わせ、良い地域社会と人間関係を創り上げます。
- それは災害があろうがなかろうが、揺るぎなく続きます。

⇒魅力があり、災害から生活を守れるまち



(2) 下知地区の目指す姿

災害に強いまちについて、下知地区では次のような姿を目指します。

避難所（施設）を増やし、災害時に一定期間生活ができたり、平常時にも使える施設となるようにします。

(3) 検討会にて出たアイデア

以下のアイデアも参考に、被災前後のまちづくりを行政と一緒に検討していきます。

◎避難施設

- 災害時には上の階に避難できる避難施設を何箇所も設置する。
- 長期浸水に備えて、一定期間生活ができるようにする。
- 津波避難タワーを設置する。
- 津波避難ビルを増やす。
- 備蓄倉庫に食料やボートなどを備蓄する。
- 日頃は楽しく使えるように、レストラン、足湯、コンビニなどを避難施設に併設する。

◎安全に暮らせるまち

- 避難場所までの誘導表示やソーラーライトを設置する。
- 堤防を強化する。
- 昭和小学校を強化する。
- 自給自足できる野菜畑をつくる。
- ペットと過ごせる場所をつくる。

第5 コンセプトその⑤ コミュニティ

(1) 働く世代についての復興の方針

- ご近所力の強いところは、人々が健康で幸せに暮らせます
- ご近所力は、日常活動と、人と人とのコミュニケーションが大切です

⇒地域活動が盛んで、名前呼びあえるまち



(2) 下知地区の目指す姿

コミュニティについて、下知地区では次のような姿を目指します。

災害から命を守るコミュニティづくりのため、イベント等を開催して、様々な世代が交流できるようにします。

防災・減災の基本は、「あいさつをするまち下知から」とします。

(3) 検討会にて出たアイデア

以下のアイデアも参考に、被災前後のまちづくりを行政と一緒に検討していきます。

◎イベントの開催

- 様々な世代が交流できるイベントを開催する。
- まちあるき、ピー玉、面子、かくれんぼなどをする。
- 丸池公園などを活用する（かさ上げて避難所としても活用）。
- 企業に協賛してもらうなどして、日頃から楽しいイベントをして、交流を深める。

◎地域内の交流

- 地域の交流を深め、下知地域を知る機会をつくれます。
- 自分の住んでいる町だけでなく、隣の町内ともつながりをつくる。
- 津波避難ビルに住んでいる人と、津波避難ビルに逃げるかもしれない人が顔見知りになるようにする。
- 住民、保育園、商店（スーパーやコンビニも）がつながりをつくる。

◎あいさつするまち

- 皆の顔を知り名前を覚え、あいさつができる地域とする。
- 家庭・学校において、子どもが高齢者・障がい者などへの理解を深める環境を整え、誰ともあいさつする子どもにする。
- 「あいさつをするまち下知から」を実現するため、声かけ隊、名札（ワッペン）、看板などづくり、子どもへ、近所の人へ、通行する人へあいさつをする。